

「安宅」は現在の石川県小松市安宅町にある地名です。京都駅から北陸に向かう特急列車サンダーバードに乗り、琵琶湖の西岸を北上し、福井、鯖江を経て二時間ほどでJR小松駅（石川県）に着きます。能「安宅」の詞章では、旧暦一月十日夜半に都落ちした義経主従は、琵琶湖西岸を船で北上し、北陸道を北にすすみます。初春の北陸は残雪が深く、舗装されていても雪に慣れない私はおぼつかない足取りです。義経たちがこの地を通った当時はさぞや困難な道中であつただろうと思いました。

義経捕縛のために急きよ新設されたという「安宅の関」の史跡は、梯川（安宅川）の河口、木曾街道沿いの安宅住吉神社に隣接する場所にあります。日本海の冬の荒波がすぐそばに迫り、振り返れば遠く白山の峰々が美しく浮かんでいました。余談ですが、この地に残る木曾街道は旧中山道（木曾街道）とは別に、木曾義仲が俱利伽羅峠で平家を破り京都へ進軍する時に通ったことで名前がつけられたそうです。また、安宅神社では関にちなんで難関突破のお守りが置かれていました。「安宅の関公園」内には歌舞伎の「勧進帳」をモデルにした、富樫某、弁慶、義経の石像が立てられ、能・文楽・歌舞伎の「安宅」を題材にした芸能資料館もあり、観光スポットになっていました。資料館の方の話では子供歌舞伎など、芸能が盛んな土地柄だそうです。能楽関係の展示の数が少なく、少々残念な思いでした。梯川を挟んだ旧市街地には古い街並みがあり、通りには「義経通り」、「弁慶通り」などの名がつけられ、義経が立ち寄ったとされる勝楽寺もその一角にあります。

さて、無事に安宅の関を通ることを許された義経一行が次に落ち着いた場所は、JR金沢駅を超えて山の手に入った北陸道沿いにある鳴和の滝（石川県金沢市鳴和町）あたりです。観光案内所で「鳴和の滝」を尋ね、さらに地元のタクシー運転手の方に住宅地の狭い路地の奥にある鹿島神社までお願いしました。安宅の関からは、JRの駅で8駅、30キロほど離れた場所です。富樫に乞われて、弁慶が酒宴で舞を舞ったとされる場所は、思っていたよりもひっそりとした所でした。能「安宅」の内容は史実ではなく、義経主従が都落ちする道中で起こったいくつかの場面を集約した物語だそうです。ですが、判官びいきという言葉が残るように、義経主従の結末を知る私たちにとって「安宅の関」という場所は、ドラマチックな歴史の断片が芸能という形で残されている場所のように感じました。

平成二十五年弥生吉日

← 史跡のすぐむこは日本海

↓ 弁慶を挟んで右に富樫、左に義経



↓ 林の中に建つ「安宅之関跡」の石碑



↑ 安宅川河口。左手奥が安宅の関跡のある安宅住吉神社の杜  
← 旧市街地のバス停「安宅」



↑ 「鳴和の滝」横の神社  
← 「鳴和滝の水」の謡が刻まれている

